

提 言

不適切な子どもの育ちに向き合う小児保健 Child Health Focusing on Adverse Environments of Children

岡 明 (東京大学医学部小児科)

いたたまれないような深刻な虐待事例の報道が依然として持続している。こうした報道の度に、児童相談所の対応の不備等の問題点が繰り返し指摘されており、今後もそうした体制の整備は非常に重要であることは間違いない。

一方で、医療現場にいて強く感じるのは、虐待ネグレクトの予防の必要性である。医療では、虐待などの結果として生じた外傷などを診療し、虐待を指摘し、行政と協力して児の保護などの対応を行うことになる。それからの育ちを支えるという意味では、虐待の発見・指摘は支援の始まりではあるが、虐待の結果を目の当たりにしているとも考えられる。どうしても、これでは遅い、と感じざるを得ない。

それではどこまで遡ればよいのかであるが、まずは妊娠期からの支援という視点がすでに国に方針として取り入れられている。特定妊婦、あるいは産褥期うつの支援に、熱心に取り組まれるようになってきており、私も小児医療の立場で、協力して課題のある妊娠や母親・家庭への支援には力を入れていくことが重要であると考えている。こうした枠組みや取り組みは、きっと将来、大きな違いを生むものと期待もしている。

しかし、そうした特定妊婦や課題のある家庭のケースの中で、特に深刻な場合には、その原因は親の生育の環境や経歴に遡ることになる。虐待がサイクルのように繰り返されてしまうということは、虐待を受けた経験者の方にとって厳しい話であり、もちろん克服し立派に子育てをされる方もいらっしゃることも重要な事実であると思う。個人的にはこれまで虐待が世代を越えて繰り返されるということを強調することはレッテル貼りのようだとめらいを感じるが多かった。

しかし、これからはむしろ積極的に、そうした課題にも目を向け、支援と予防の取り組みを進めることが重要であり、それは小児期から持続する成育医療の課題としてとらえていきたいと考えている。医療の中でも、虐待を受けた経験、あるいは貧困の中での育ちなどは Adverse Childhood Experiences として総称され、注目をされてきている。また学校ではいじめの問題が深刻であり、これらは医療の課題でもあり、保健にとっても重要な領域である。

学童期や思春期になると医療と接点が減ってしまう現状を、まず変革していく必要がある。逆境の中で育つ子どもがいても、その子どもたちの相談窓口として医療や保健が期待されているかといえば、そういう状況にはない点をわれわれも反省する必要がある。小児医療や保健が、身体の病気の窓口だけではなく、心の育ちや子どもの環境にも目を広げていく必要があり、そのための方法論やシステムを作り、実績を積み重ね、社会からの信頼を得る必要がある。これまで十分に対応してこなかったこうした領域に積極的に向かい合うことが、これからの小児保健にとって重要になってくると考えており、それぞれの持ち場での具体的な取り組みが日本の将来にとって必須であろう。

